

香取遺產

vol.
229

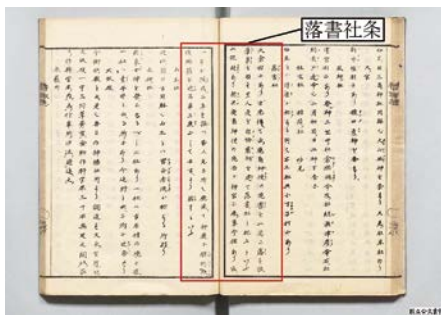
おとしぶみ
落文神社蹟
あと

大倉の国道356号線から踏切を越えて、側高神社方面へ上り、東関東自動車道を越えた先に、ツツジやサツキに囲まれた、落文神社蹟は存在します。

その昔、鹿島から使いの鹿が文書の巻物をくわえて香取の神へと遣わされた際、狛師に追われ逃げるうちに文書を落としてしまい、責任を感じた鹿は苦しみ悶え死んでしまいました。その後、里人たちがその霊をまつたのが、神社のいわれとされています。なお、文書は里人



▲落文神社蹟・建て直された鳥居



▲小林重規『香取志』落書社条抜粹（国立公文書館デジタルアーカイブより引用）

に拾われ、無事、香取神宮に届
けられたとのこと。この文
書を拾った場所であることが近
在（こあた）の小字「披（ひら）露（ろう）」の由来とされ
ています。

このいわれにつき、香取神宮
神官であり、国学者でもあった
小林重規シゲノリは、天保4（1834）
年刊行の著書『香取志』にお
いて、「此説疑あり」としてい
ます。しかし一方で、「鹿島神ミツ
使カヒの鹿吾が神宮に来ル事今猶あ
り」ともしており、1・3年ご
とに「鹿来りて神庭に膝折伏ヒザオリフシ
後二瑞籬ミツを巡る事三度にして
去」という姿が昔から見られて
いることを述べています。

津宮の学者、久保木竹窓が文政11（1828）年頃に著した『香取私記』によれば、かつては里人によってまつられ、11月17日に祭事も執り行われていた神社であったようですが、現在では同じ大倉地区の側高神社に合祀ごうしされており、神社跡には鳥居と嘉永7（1854）年奉納の手水鉢、「落書大神之社蹟」と書かれた石碑が残ります。石碑の裏には明治42（1909）年に合祀されたことが刻まれています。

落文神社蹟の鳥居は、令和元年の台風により倒れてしまいました。この度、令和7年7月2日に地元の有志の皆さんにより再建されました。

地域の伝承を伝え、今なお大切に守られている神社跡です。

※瑞籬…ずいり、みずがき。神社など神聖な場所の周囲にめぐらした垣